団地の中に 小さな図書室 つくりました

築３０年を超える団地の一室に、**まるで＂秘密基地＂**のような、建築学生たちが営む子育て支援スペース**『一つ山絵本サロン 105』**を開く。年季が入った玄関扉を開ければ、天井まで続く木の飾り棚が廊下から居間へ連なり、図書館から借りた**１８０冊の絵本**が並ぶ。絵本サロンの運営を通じて、学生が団地で暮らすように過ごし、住民と関わり合いながら、団地の課題や魅力を分析し、団地の可能性を発信していく。

建築学生たちが営む
子育て支援スペース

105

一つ山荘
絵本サロン
105

０１　ターゲット

ターゲットは若い子育て世帯。現在の公共住宅団地は高齢単身者が増え、空き室が増えている。この状況を改善するため、若い子育て世代が団地を訪れる機会を作るための絵本サロンの運営を行う。絵本サロンが地域の拠点となり、いろんな世代の方の交流の場をめざす。

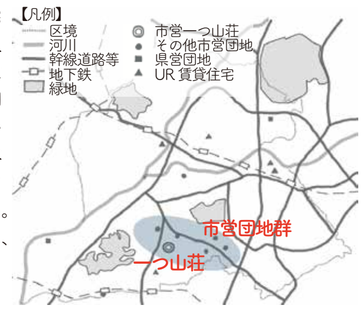
０２　活動方針

＜プロジェクトへの向き合い方＞
①時間的猶予がたっぷりあること
②途中でアイデアや修正を加えられること
③実験的な試みにトライできること

そんな環境を大切に、
企画から設計、施工、運営までを学生主体で取り組む

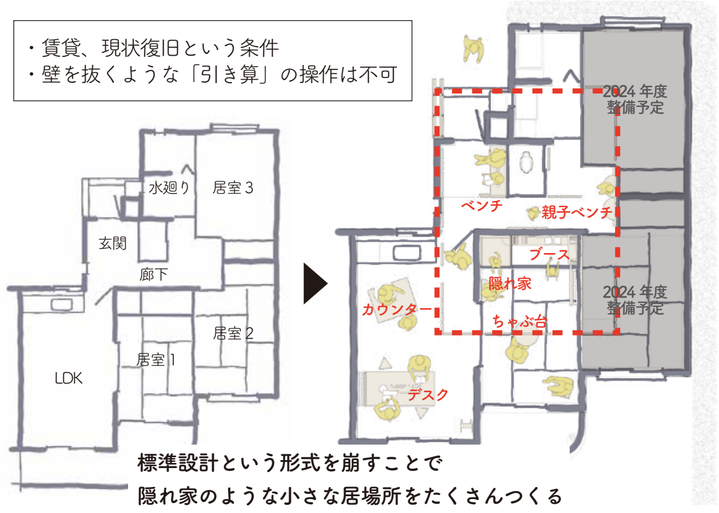
０３　立地――団地の文脈

戦後住宅政策の中心手段の一つは、公共住宅団地の開発であった。高度成長期に多くの人が農村から都市に移り住み、公共住宅団地はその受け皿となった。いま、その公共住宅団地には高齢単身者が増え、空き室が増えている。この状況をどのように改善し、維持すべきか。戦後に蓄積してきた公共住宅ストックは、社会安定を下支えする貴重な資源である。社会資源としての公共住宅の役割を問い直し、新たな方向性を見出すことが、課題である。



０４　計画

・賃貸、現状復旧という条件
・壁を抜くような「引き算」の操作は不可



標準設計という形式を崩すことで
隠れ家のような小さな居場所をたくさんつくる

公共住宅団地がアプリオリにもつ標準設計という形式を崩すことから考えた。**絵本サロンエリアを間取りの中心に据え、その境界にスリット壁を立てる「足し算」の操作**を施した。決して広くはない間取りをさらに壁により細分化することで、小さなニッチをあちらこちらに発生させ、訪問者にとってのささやかな居場所になることを期待する。

０５　学生の DIY による家具たち

建物に一切傷をつけない工夫や作業効率のための合理性など、自ら手を動かすことで設計の解像度が高められ、図面を作成するだけではわからない気づきが得られる。

０６　空間コンセプト　「団地の中の小さな図書室　秘密基地のようなとっておきの場所」

暮らしの観察

サロンの運営主体は、大学で建築を学ぶ学生たちだ。そこで、自らが参画した物件の在り方を検証する。「子育て支援スペース」は果たして、子育てを支援できるのか？住まいと地域との接点づくりは、日常の延長にそのきっかけがあるのだと思う。だから、ここで暮らすようにふるまいながら、「団地の環境」を感じ、考えてみる。

入り口
木のスリットサインと黄色の看板がお出迎え。玄関の中には囲われた小さな空間。孔の空いたベンチの下には絵本たちが隠れている。

運営する学生と絵本サロンを訪れる利用者たちとの交流
運営する学生と、毎週のように通ってくれるこどもたちとのつながりが生まれてきている。学生たちはここで暮らすようにふるまいながら、団地内の住民の方や地域の方との接点づくりをめざす。

どうぞのボックス
オープン時には、誰でも持ち帰って、誰でも持ってきて入れられる。

廊下の奥の双子ベンチ
部屋だけではなく、いろいろな場所で子供が過ごす居場所を用意している。

可動式のカウンター
背の高いカウンターの中に入った人を取り囲んで、立ちながらで語らう場。

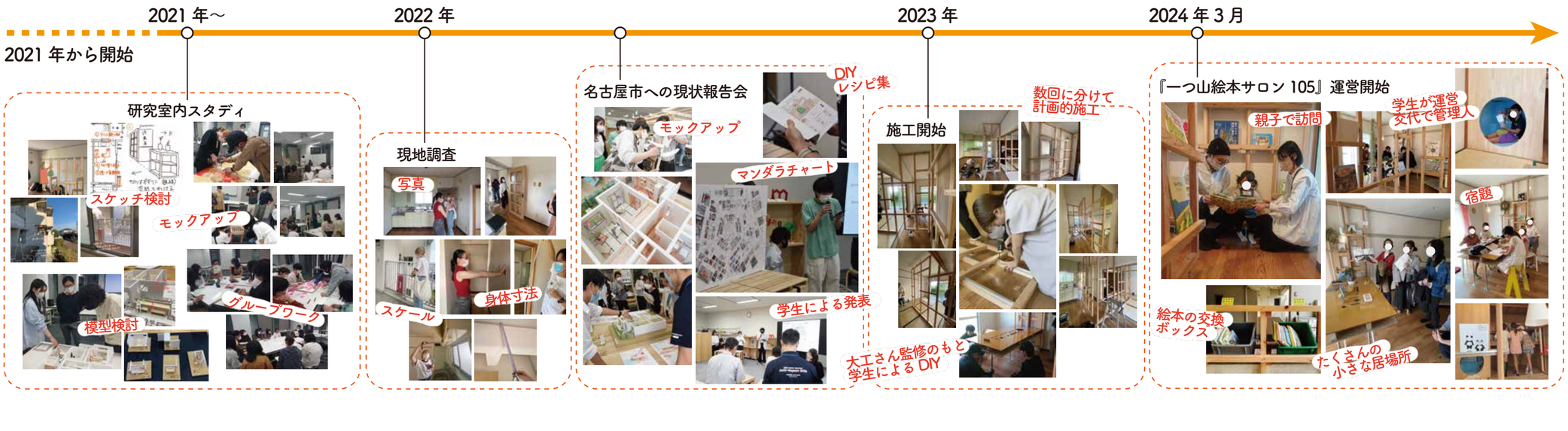
押入れを活用したこどもの隠れ家
物入れとして使われる押入れが、大きなテーブルへと変わる。絵本と木に囲われた、温かみのある空間。

作家さんの作品たち
様々な作家さんによる作品をおくことで、作家さんの発信の場、利用者と作品との出会いをつなぐ場となる。

黄色い、孔の空いたテーブル
孔には絵本やペン、ボトルや植木鉢が入る。

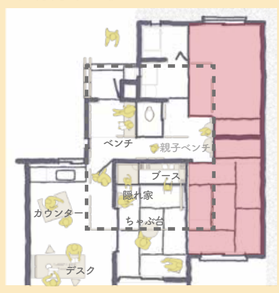
０７活動タイムライン

2021 年より続いている研究室の継続プロジェクトである。毎年度、学部４年生が中心となり、検討を重ねながら学生主体で取り組んでいる。



０８　今後の予定

今年度、残りの２部屋と庭の整備、来春にグランドオープンを予定。
学生が暮らすように運営する中で、サロンの存在が認知されていき、多様な人とのつながり・新しい展開が起きることを期待する。



名城大学谷田研究室
代表者：和田　明花
minfadsgn@gmail.com
Instagram：@tanidalab